

『五所川原市史』史料編1

栗村 知弘

一

県史に先立って県内各市町村での、市史・町史（誌）・村史（誌）の刊行計画が次々に発表され、また完成発刊されたものもある。

筆者も、かつて八戸市史編纂に関係し、平成五年十一月に完成した六戸町史、間もなく刊行される東北町史執筆に携わった者として、当市史の発刊に期待と関心を持っていた。

実績のある弘前大学国史研究会から、機関誌に書評をと依頼され、浅学ながらこれを引受けてはみたが、いささか荷が重い感じがする。若干その構成・内容について紹介すること、御寛恕の程お願いしたい。

二

筆者の現在関係している六戸町史、東北町史はいずれも通史編、史料編の区別はしていない。本文の中に史料・資料を引用し、挿入しながら、古文書であれば、読者である町民を念頭に入れて、これを読解したり、意識したり、統計処理をし、一覧表にまとめたりして、これを本文中に入れて記述を進めている。

また、考古資料であれば、発掘調査報告書の中から出土品の写真、実測図、拓影図等を引用掲載し、報告書執筆者の見解を紹介するなどして記述する方式である。

本『五所川原市史』と違って、通史編・史料（資料）編を区別しないので、本文は引用文や史料が多数挿入されてページ数が増えるが、いちいち史料編を参考にする必要はない。また難解な学術上の問題や術語を平易に敘述できるという利点もある。

しかし、史料（資料）が執筆者の恣意によって選択される場合もあるので、他の史料の方がより適切であることも考えられ、それが紹介されないでしまうケースもあり得る。

当市史のように区別すると、どうということが考えられるのだろうか。まず、数多くある史料（資料）を史料編にどこまで取り入れるかという問題がある。また通史編にそのうちどれほど引用すべきかという問題もあろう。

遺跡の発掘調査が近年著しく増加し、その報告書も数多く刊行されるようになったが、そのどの部分をどの程度引用掲載するかという問題もおこる。

市民に理解できるようにという前提のある通史編を書く場合、本文中にやたらに注記が並び、章節の結びにその注解文が記述されるのも工合が悪いものである。

八戸市史の場合は通史編一巻、史料編十巻であるが、史料編すべては、寛文四年（一六六四）に成立した二万石八戸藩の御日記の抜粋が主であって、中世史料等は取められていない。予算とそれに係わる人件費等を

考えればそれが精一杯であったということであろう。

従って通史編は先史・古代・中世等の史料(資料)はわずかに顔を出した位で終わっている。通史編・史料編を分けて編纂するにしても、このような問題が生ずる。

分けるにしろ、六戸町史・東北町史のようにするにしても、長所・短所があるが、広域の市史の場合、やはり史料(資料)が膨大になることは当然なので、やはり当市史のような形になるであろう。そして、まず通史執筆の前段として、やはり史料編から刊行するのが普通であると思う。

本史料編の「まえがき」に編集委員会の自然・原始・古代・中世部会長の小口雅史氏が「古代の遺跡としては、日本最北の須恵器窯跡群として、前田野目・持子沢窯跡が著名である。須恵器文化の意外に広範かつ急速な分布を示すものとして重要であり、とくに一節を立てて詳述した。未発掘の窯跡の中には遺構の保存状況が良好なものもあり、当部会としては通史編に向けて、より詳細な調査を実施する予定である。」と述べられているが、市史編集の全体を見通した上での見解であると思われる。その取組みの姿勢がよく表現された文である。ただ、より詳細な調査とは、発掘調査のことと思われるが、発掘し、整理し報告書にまとめるという時間と、市史刊行の時間をどう調整されるのか、難かしいと思う。やはり、ある時点で切って、その時点での学術上のレベルで記述しないと、編纂事業が遅れるのではないだろうか。もちろん予算的裏付けと相当の年数を与えてくれるのであれば、これは筆者の杞憂に過ぎない。

三

市町村史(誌)刊行で最も大切なのは、その事業の基本理念を明確にしてから着手することであると思う。

当市史の場合、この史料編の「監修のことば」の中で編集委員長の長谷川成一氏がそれを明示されているので、まずこれを紹介したい。

- ①「未来を過去の視座から見通す」精神をもって編纂にあたる。
- ②新たな史資料の調査・探訪・発掘を基本とした市史であること
- ③五所川原市という一地域に住む人々の歴史的な課題を追求しながら、たえずそれを全国史の動向の中に位置づけ、それによって新たな日本史・日本北方地域史の創造の一端を担おうとする精神を持ち続ける。

④当市が形成される過程を自然や人文的特徴を踏まえながら明確にし、自然環境と人々の暮らしとの関連にも着目する。

以上の四点を基本理念として明確に打ち出されていることは、これを読みかつ研究しようとする者にとっては誠にありがたいことである。また、執筆者にとっても、記述するにあたって、一本筋金を入れて書けるという力強い励ましともなったのではないだろうか。

現に、長谷川氏も「執筆に携わった各委員と編集協力者は、先に掲げた基本理念を良く理解し、その精神にのっとり編纂に従事したのであり、換言すれば本巻は基本理念をまさに体現したのではないかとひそかに自負している。」と述べられている。

内容を拝見してみても、まさにその通りである。執筆者並びにスタッフ全員に心から敬意を表するものである。

四

次に本書の構成と内容を紹介する。大別して、考古編と民俗編に分けているが、まず考古編の構成をみてみよう。

第一章 五所川原市域を中心とした時代概要

第一節 旧石器時代、第二節 縄文時代

第三節 弥生時代、第四節 古代

第五節 中世 付表 考古年表

第二章 五所川原市域の遺跡概要

第一節 縄文時代（三五遺跡）

第二節 弥生時代（一遺跡）

第三節 古代（二五遺跡）

第四節 須恵器窯跡（一六遺跡）

第五節 中世城館跡（八遺跡）

第六節 中世陶磁器類（七遺跡）

（参考）五所川原市内所在の陶器資料

第三章 遺跡研究史と参考資料

第一節 五所川原市域における遺跡調査・考古学研究の歩み

第二節 五所川原市域に関連した考古関係文献目録

第三節 五所川原産須恵器の分布

第四節 参考資料

付章 自然科学的分析の結果（横組み）

第一節 観音林遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析

第二節 観音林遺跡の赤色顔料と黒色物質の化学的調査

第三節 観音林遺跡出土鉄器の金属学的解析

第四節 五所川原窯群の須恵器の化学特性とその伝播・流通

以上のような構成であるが、第一章は後で刊行される通史編の概要を記述したもので、考古年表を含めても、わずか一六ページで、考古編のいわばガイド役である。一般市民にとっては以下の考古関係を読むためには最低限必要な知識であろう。

第二章は、縄文時代から奈良・平安時代の遺跡を立地・性格・出土品の三項目に要約して記述している。いわば遺跡台帳の概要を掲載したもので付図の遺跡分布図とあわせて活用してほしいものである。このうち第四節は日本最北の須恵器窯跡群としての重要性を考え一節を設けたものであることは、前述の小口氏の「まえがき」にもあるとおり明らかである。市内各窯跡の発掘調査報告書から福田友之氏が手際よく要点をまとめて紹介している。第五節の中世城館跡は、鳥瞰図を入れ、古地図、縄張り図、現状写真等も取り上げ、出土品などからも考察を加えるなど行き届いた解説である。史跡七戸城跡発掘調査の担当者としての経験を十分生かした、小山彦逸氏の丹念な記述は見事である。

第六節中世陶磁器類は、地道ではあるが、着実に現地を調査し機関誌「津軽平野」などで研究発表してこられた半沢紀氏が遺跡ごとに産地・器種・特徴など要点をつかんだ解説をしている。今後、日本海側の交易史研究に寄与すると思われる。

第三章第二節の考古関係文献目録と、第三節五所川原産須恵器の分布の項は、市民より考古学、歴史学を学ぶ私達にとって貴重な文献である。筆者が六戸町史・東北町史を執筆している時、この史料編が手に入って

いたらと、今非常に残念に思っている。

東北町では、町史編纂にあたって、筆者を調査担当者として、「白旗館遺跡」と「内蛭沢蝦夷館遺跡」の発掘調査を実施した。その際出土した須恵器を、本編付章の第四節を執筆された奈良教育大学の三辻利一氏に分析を依頼したが、その結果もここに取り入れられていることを知り大変うれしい。執筆した福田友之氏の幅広い研究成果のひとつであろう。

さて、当史料編で特に注目されるのは、付章とした「自然科学的分析の結果」ではないだろうか。

このような報告書は、通史編に登場することは、まず考えられない。史料(資料)編が用意されている編纂事業でなければできないことと思う。

付章の「はじめに」の項で、福田友之氏が産地分析の資料となった県内各地から出土した須恵器の紹介しており、また黒曜石、赤色顔料産地の現地写真なども掲載しているのは誠に親切である。

第一節の京都大学薬科哲男氏の「黒曜石製遺物の産地分析」は、縄文時代の交易とか文化交流を理解する上で貴重な報告である。五所川原市の遺跡から出土した石器が、北海道の白滝地区、秋田県の男鹿地区の原石から製作されたものであることが明らかにされたことは大きな成果である。またわが国の黒曜石の原産地を示した地図は大変参考となる好資料である。

第二節の八戸高専の小山陽造教授と千葉憲一技官の「赤色顔料と黒色物質の化学調査」では、特に黒色物質いわゆる天然アスファルトが秋田県昭和町豊川字槻木で産出されたものであると同定されたことが報告さ

れている。これも天然アスファルトの交易の問題、生産用具等の接着剤などに利用するという縄文時代の技術の問題等の究明に貢献するものと思う。第三節の岩手県立博物館赤沼英男氏の「鉄器の金属学的解析」、第四節の三辻利一氏の「五所川原窯跡群の須恵器の化学特性とその伝播・流通」も考古学・歴史学を支える重要な研究成果で、特に第四節の報告は、前述した第三章第三節の「五所川原産須恵器の分布」の基礎となる資料である。報告の最後にある産地推定の結果と題する表一〇は重要である。

なお、この付章は横組みの版で、縦組みの版の中にこれを入れることは編集者にとって不本意であったかも知れないが、結果的によかったと思う。史料編であれば許されてもよいであろう。もちろん通史編ではこの体裁は避けるべきである。

五

民俗編をみると、文化庁指導による民俗調査報告書作成の際の構成によっている。

従って、他市町村の調査報告とすぐ比較研究することができるという利点がある。

ただし、本編では五所川原市の特色を考えて「虫送り」の行事については、一章を設け第六章に詳細に記述してある。

次に構成を紹介する。

第一章 社会構成

第一節 自治組織 第二節 年齢集団

第三章	家族と同族
第二章	人生儀礼
第一節	産育、第二節 婚礼 第三節 葬式 第四節 その他
第三章	生業
第一節	稲作 第二節 労働慣行
第三節	サルケ他
第四章	衣食住
第一節	衣生活 第二節 食生活
第三節	住生活
第五章	年中行事
第一節	正月行事 第二節 春から夏の行事 第三節 盆行事 第
四節	秋から冬の行事
第六章	虫送り
第一節	漆川の虫送り(以下第九節まで九つの集落の虫送りを記述)
第七章	信仰
第八章	その他
第一節	芸能 第二節 遊戯・娯楽
第三節	口頭伝承他

以上の様に八章から構成され、そのうち前述したとおり、五所川原市の代表的民俗行事である虫送りに一章を設けている。

記述はすべて、現地での調査で収録されたものを基本としているため、資料としては第一級のものとなっている。

民俗調査で一番大切なのは調査者が話者から聞き取る技術であるとい

くいわれる。しかし話術だけ上手でも肝心なのを聞きだせない。それを裏打ちする民俗学そのもの、知識、長年調査に携わった経験がなければむりである。本編の内容を読んでもみると、無駄がなくよく整理された要点がおさえられており、ある程度、県南に住んでいる筆者でも情景を想像することができる。誠に巧みである。

青森県立郷土館で長年民俗調査に携わり、市町村の調査の指導にあたってこられた成田敏氏の執筆である。

筆者は庚申信仰に興味があり、「八戸地方の庚申」(上・下)と題して小冊子を八戸市教育委員会から刊行して頂いたことがある。津軽地方のものでは、小館衷三氏の論考を拝見している。本編の中では第七章信仰の項で、漆川集落の庚申様の一例しか紹介されていない。

信仰行為そのものが現在も続いているため記録したと思われるが、小館氏によると五所川原市内だけで一四一基の庚申塔が確認されている(「津軽の庚申塔」一九九一)。史料編であれば、信仰の行為そのものだけでなく、過去の信仰の証である庚申塔の分布図、所在一覧表だけでも掲載してほしかった。

六

以上、考古編、民俗編の構成・内容について紹介した。書評とまではいかなかったと思うが、いずれにしても、市史史料編としては出色のものである。一般市民向けというより研究者向けといつてよいのではないかと、そんな感じがする。考古学を学ぶ筆者にとっては大変利用価値のある書物である。県内だけでなく、北海道・東北各地の考古学並びに古代・

中世を研究する者、民俗学を専攻する人々は、是非書架に備えてほしいものである。

（五所川原市 一九九三年 菊版 五八六頁 三五〇〇円）

（くりむら・ともひろ 日本考古学協会、青森県文化財保護協

会常任理事）